玄洋社関係史料の紹介

同時代から見た頭山満 ④

ー書と人物ー

石瀧　豊美

第60回

以下は、夢野久作「近世快人伝」からの引用です。

◆

大正元年頃であった。桂内閣の憲政擁護運動のために、北海道の山奥から引っぱり出された奈良原到翁は、上京すると直ぐに旧友頭山満翁を当時の寓居の霊南坂に訪れた。

互いに死生を共にし合った往年の英傑児同志が、一方は天下の頭山翁となり、一方は名もなき草叢裡の窮措大翁となり果てたまま悠々久濶を叙する。（中略）

それから入代り立代り来る頭山翁の訪客を、奈良原翁はジロリジロリと見迎え、見送っていたが、やがて床の間に置いてある大きな硯石に注目し、訪客の切れ目に初めて口を開いた。

「オイ。頭山。アレは何や」

頭山翁は、その硯をかえりみて微笑した。

「ウム。あれは俺が字を書いてやる硯タイ」

奈良原翁は、それから間もなく頭山翁に見送られて玄関を辞去したが、門前の広い通りを黙って二三町行くと、不意に立止って鴉の飛んで行く夕空を仰いだ。タッタ一人で呵然として大笑した。

「頭山が字を書く……アハハハ。頭山が字を書く。アハハ。頭山が書を頼まれる世の中になってはモウイカン、世の中はオシマイじゃワハハハハハハハ……」

そこいらに遊んでいる子供等が皆、ビックリして家の中へ逃込んだ。（インターネット上の電子図書館「青空文庫」から引用）

◆

奈良原至は明治九年、堅志社に属し、前原一誠の萩の乱に連座して、箱田六輔・頭山満・進藤喜平太らとともに投獄されました。箱田だけは懲役に服し、頭山・奈良原らは今で言う処分保留という形で釈放されました。それで夢野久作は「死生を共にし合った往年の英傑児同志」と書いたのです。大正元年と言えば明治四十五年。萩の乱から三十六年を経過しています。

おもしろいのは、田舎暮らしで食うや食わずの貧窮に陥っている奈良原が（事実はともかく夢野久作はそう描いています）、天下の名士となって揮毫依頼を受けている頭山を批評している部分です。「頭山が書を頼まれる世の中になってはモウイカン」というわけです。もちろん頭山はそれを鼻にかけて、ふんぞりかえって、いばりちらすような人ではありません。頼まれたら断れないという性格、もしくはそういう生き方を自分に課していたのでしょう。

頭山の書は掛け軸にしても、扁額にしても、年号や年齢の記載がなく、いつ書かれたものかが特定できないのが残念です。わずかに見ての感想に過ぎませんが、やはり時代による変遷は感じられます。時代が特定できそうなのは、雑誌や単行本の口絵として収録されている色紙です。これらは出版年のごく近い時期に書かれているはずで、データを集積すると一定の傾向がつかめるでしょう。ごく大まかに言えば、初期のものは頭山らしい奔放さに欠けるようです。そうだとすると、頭山の書は規範からはずれているように見えますが、それは規範を押さえた上での逸脱と言えそうです。

書家は頭山の書をどう見ていたのでしょうか。これについては疋田寛吉氏が「世界日報」に連載した「近代文化人の書」の中で取り上げていることを、昨年、頭山興助氏から教えられました。疋田氏の見解は私も同意できることが多く、疋田氏に会ってみたいものだと思いました。

後で調べたところ、疋田氏は詩人、書道評論家で、一九二三年生、一九九八年没。私がその名を知った時にはすでに故人でした。「近代文化人の書」は『書美求心　近代文化人の書』（一九九〇年、平凡社）に収められています。正田氏は専門の書家の書よりも、画家や文人の書に惹かれるものがあったようです。特に會津八一と川端康成を高く評価しています。そうした画家・文人に混じって副島種臣・犬養毅・頭山満の名が挙げられています。副島、犬養は定番の能筆と言えそうですが、頭山を加えているところに正田氏の異才が垣間見えます。

頭山について、正田氏はこう述べています。「謎に包まれた頭山満のキャラクターを如実に語るものは、唯一その遺墨だけである。」

すでにここに正田氏の非凡な鑑賞眼がうかがわれます。正田氏の評価の基準はただ書のみです。続けてこう言います。「頭山の書には不思議な独特の説得力のある書格があるのだ。スケールが大きく筆力が新鮮で、半世紀経って名前は忘れられても、その書は今も脈動し続けている。並の技法や書美からはみだし、過去の枠に納まろうとしないのだ。」

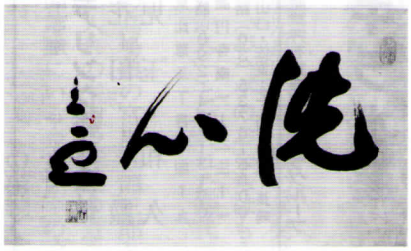
頭山の書は西郷隆盛、副島種臣の書に似ているとも述べていますが、私は山岡鉄舟も加えたいと思います。確かに頭山の書と通い合う何かを感受するのです。

「木堂（犬養毅）は早くから頭山の書を面白く見ていた。唐墨を人から贈られるとおすそわけしたり、頭山の書に向きそうな太い竹筆を送ったりしている。」（疋田氏）

頭山が竹筆を使い始めるきっかけを与えたのは犬養毅なのでした。

平凡社の『書の日本史　第八巻　明治／大正／昭和』（一九七五）でも頭山の書を収めています。これは頭山から三浦老台（三浦梧楼）宛て、大正六年の書簡とされています。ただ一見して違和感があります。ごくふつうの書風で、頭山らしさが微塵もありません。「頭山満」という署名も掛け軸や扁額に見るものとは違います。しかしこれを異筆ないし偽筆と決めつけるのはやめておきましょう。時代による変遷も考えられるからです。

『書美求心　近代文化人の書』に収録されているのは「洗心　立雲」＝**写真**＝で、右上の関防印は前回紹介した「以虚受人」、署名の下の白文印（陰刻）は「頭山満」と彫られています。本来はその下に雅号「立雲」と記した朱文印（陽刻）があるはずなのですが、スペースがなくて略されたのでしょう。

「洗心」は大塩平八郎の塾名「洗心洞」を想起させます。「洗心」の典拠は『易経』です。頭山の真筆に間違いありませんが、筆は竹筆ではなく、墨をたっぷり含んだ毛筆です。

付記　福岡県出身の漫画家小林よしのり氏が『大東亜論　巨傑誕生篇』を刊行しました（二〇一四年一月、小学館）。月刊誌『SAPIO』に連載されていて、今後数巻に及ぶものと思われます。帯には「西郷隆盛の遺志を継ぐ者　玄洋社・頭山満の勇躍を見よ」とあります。頭山の生涯を真正面から取り上げたものです。従来のステレオタイプでない、頭山満像を見事に描いています。